

畫筌

畫具製法  
畫法口訣

一





畫筌序

本朝騁譽於丹青者豈止數十家而已耶雖然歷倒衆史獨步古今者雪舟已下不足數焉若狩野法眼元信者絕妙精巧所謂畫家百世之師也其流風氣韻瀟漫乎天下



紙筆以為業濡墨為勒者不知幾千萬人本州佳士狩野法橋幽元者探幽齋守信之門人也奉仕邦君擢為畫師其為人天機所到素以為絢今故曰繪事後素守房其庶乎予自夙齡游畫工之藝研

凡例

一卷首載六法三品而妄加臆見為之和解後學者訂正之則幸甚

一所題畫論傳受之篇師小方守房常談于門人之語也辭固雖卑陋畫學秘要在此篇豈可不盡心哉

一畫彩之種類及製法悉記之深所畫工之秘者也

一凡山水草木禽獸蟲魚人物鬼神之類皆有真州行之筆法雖不一定必有規矩種類各分部門而述之彩法之序不令其先後亂之不其精詳者厭多而省之



一凡引用書又不多如圖繪寶鑑立翁畫傳圖繪宗彝本草綱目大和本朝本朝食鑑列仙全傳本朝畫史聖賢像贊佛像圖彙花譜和爾雅倭漢印圖等畧撮其要以為畫工之一助也

一凡所圖州樹鳥獸器財等之狀悉以而不要似于真矣但隨畫家之法而已

畫筌全

我本邦馳譽丹青者代不乏其器雖然畫亦老流各有其長與所短而未嘗見其多間然矣近代如法印探幽齋狩林字信則胸中造化毫端生有物動植飛潛諸品得之心而應手以通神之妙豈者長與短之緣乃百謂古今第一佳手矣然之前而幽之者探幽齋之門人而善畫者也林守篤子亦得其傳於幽元翁以未寓思丹青多之斗乾勤不供後乃自勝寫



探函為函之為也。子舞而休記丹之。法欲惟使世人  
 志其難而為之。少傳之憾焉。守焉。而謂勤矣。或謂之曰畫  
 有六法。三祖之傳。識之。子曰。後焉。昔郭汝。汝馬。聽伎人歌。而  
 言佳。石季倫。問其曲。郭云。不知。季倫笑曰。卿不識。進。郭言  
 佳。郭答曰。譬。如。見。西。施。何。必。識。姓。名。然。後。知。予。於。後。景  
 六。然。雖。不。知。繪。事。亦。識。其。為。佳。子。復。莫。言。問。者。領。而。之。  
 於是乎。書。皆。言。保。身。丑。小。是。者。

浪華

字任專 女叙



# 畫筌卷一

## 目錄

序

凡例

六法

三品

十二忌

製作指模

觀山水賦

畫論傳受秘事口訣

墨色

骨法

筆勢

習畫法

描草木法

筆法

寫形法

彩色法

畫意



地挽法

繪押朱印法

繪刷子圖

繪筆圖

切落之圖

繪具製法極秘傳

畫筌卷一終

畫筌卷之一

筑前直方 隱士魯軒林守篤 編

六法

一曰氣韻生動

守篤竊ひそかに按おさずるに是こゝハ縱たてハ鬼神人

物鳥獸草木禽あひだ事ことヲ理ことわりとこそこれこれハ皆みな靈氣れいきと會あひ

さねり、勢いきほを出いし氣いきと吐はけ活潑しつぱくと比ひする活いきほる者ものは皆みな修しゆ

目めありて氣いきとこれこれに描えきしこれこれハ一ひと筆ひつは神かみのま

ありて筆ひつの純じゆんとさう所ところ毫釐ごうりんも欠かけずもの

二曰骨法用筆

骨法こつぽうハ一ひと画えの骨こつ描えのとく見みるは

骨こつ一ひと畫えと以もつて上うへ手て下したを分わかるもの之これは法はふハ強直きやうぢく

温ぬる和やわ氣いき貴き潤うるひて光あ沢たくあり泥どろをたたへて輕かろく











神品 愚識人生れて二三歳の比より畫意ありて常く  
 の好む戲を法と好て描しと終る小兒とて其後をかくと  
 七五石人の隙を行て若りし功至業熟しより其石人  
 是より及らぬを指とてその神靈と具足に  
 妙品 筆墨超絶傳深得宜意趣有餘者謂之妙  
 品 術と好熟し格式と越法と能て描といふも法と  
 能品 得其形似而不失規矩者謂之能品 吾法と  
 ちて格式と意と方と法と是と師者とより又其人及らぬ  
 ものなり

十二忌

元鏡自然曰一忌置拍密二遠近不分三山無氣脉  
 四水無源流五境無夔險六路無出入七石只一面  
 八樹少四枝九人物偃儂十樓閣錯雜十一瀟淡夫  
 宜十二點染無法

制衣作描摸

帝王天日龍鳳乃表と崇に儒賢ハ忠信礼義の風を  
 あり以て武士ハ勇悍英烈の顔と多と貴戚ハ侈靡を  
 容を尚上隠逸ハ高世の節と一穢守仕女ハ秀色一樓閣乃  
 慈に宜し一田家ハ醇既扑野の真あり 欽順ハ若く方使  
 乃顔あり道流ハ修真度世の範と具ハ外夷ハ華を慕  
 欽順の情あり天帝ハ威福嚴重の儀と明より鬼神ハ



醜醜馳進の状と作以畜獸ハ筋力精神毛骨騰起  
を倚畜一禽鳥ハ毛羽翔らと拳ヲ飛集の形と雲  
魚龍ノ游泳の妙升降ハ巨細と變々水ハ湯々  
動々人をして浩然江湖の志ハありて屋木ハ折  
聲々水ハ均壯深遠空ヲ透す花竹ハ四散乃  
景候あり澄濁ノ向背荀條の老嫩芭蕉の后之自  
然艷柔間野園蔬の野蔓ハ咸去と出るの体性なり  
古ハ外古人乃高論多クといハれ神ハの者乃知レ此  
故子これと畧レ

山水と觀賦

山水と山川海人家をく  
まら後乃あり

凡山水と畫に意筆子のせんハ在里夫山尺樹寸る豆

人此を法なり遠人目をく遠樹枝あり遠山皴なく  
隱々として眉の如く遠水波々々々と雲と林一は其の  
決り山腰ハ雲塞り石壁ハ白水塞り樓閣ハ樹塞り  
乃路ハ人塞り石ハ三面と有す此其の訣なり凡山水を  
畫ハ尖峭ものハ峰平夷ものハ嶺峭壁ものハ山崖  
完わら者ハ岫石よりものハ巖飛圓なるものハ巖  
と夾ものハ壑而山水と夾ものハ澗水川は溪ものハ溪泉  
通る者ハ谷路下のお山ハ坡月と極く平夷なる者ハ坂  
能辨別せし別山水乃彷彿なりと知や其を觀る  
人氣象と看後ハ清濁と辨(實主の胡搢と分) 穉  
の威儀を列ぬ多クを列亂る少クを辨る多クを



少くす遠色と初と色せし遠山の色水と連つことと  
 清と山腰の寺と回抱し安とことと觀よ新居の院と  
 小橋と壺へ一跡あるまよ八人けり跡をさよ八林本あり  
 岩屋の壺本根と露と藤纏流し流し石巻ハ歌  
 空より水痕あり凡林木と修し遠ハ別疎平と色ハ  
 別高家より葉ありもの枝葉よまよ水とももの硬松  
 皮ハ籐の似柏皮ハ身纏およ生する者ハ脩長ありて直  
 石よ生する者ハ卷曲ありて伶介古木ハ常多ありて半を  
 死守寒林ハ扶疏ありて蕭木林より凡ハ水と畫ハ須  
 四時と接し一春景ハ別雲消煙籠樹木隠ハ  
 して遠水ハ藍と揉ハ色堆まありて夜涼ハ別林木と

小散ハ緑ハ平坂雲と雲牙濕布水ハ近ハ秋景  
 ハ別水天ハ色ハ籠とる疎林ハ雁塞ハ揚ハ州江ハ  
 鳥る冬涼ハ別地と雷と水ハ老松影と雲ハ漁舟あり  
 傍ハ水洲ハ沙平ありて凍雲點淡あり酒旗孤村あり  
 風雨ハ別と地と分と東西を辨し一人の傘蓋漁又  
 の蓑衣あり風とてぬまハ但樹枝と着よぬま風  
 あハ枝葉下り雲ハ白雲と水ハ天雲ありて薄  
 霏凝る山光翠と流ハ網と斜暉ハ晒す暮景ハ別  
 山落日と啼ハ帆ハ江濱ハ節ハ人行多ありて半ハ此  
 と捲ハ或ハ煙斜ハ雲捲ハ或ハ遠岫ハ雲捲ハ或ハ  
 秋江と鳴ハ水ハ流ハ古塚新碑ハ法布置ハ岐ハ



畫論傳受秘事口訣  
すうふん得られり意と此なる者ハ須心ヲ至微と會  
す

畫論傳受秘事口訣

夫畫の凡ハ言語文字と以て得へざるありて  
心通するありての道也知る者ハ皆是也  
得るの言語得る者ハ或ハ知り或ハ知らず一ハ精く一ハ  
疎なり故ハ情と名付て約する者ハ皆是也文  
字より得ずは固く情を以て得るを以て精一然  
知て神なる神靈なる者ハ畫工の神品なり  
六法三品或ハ何人の流といふことと云ふされ  
たハ神品なり

ありて是と上と下と又畫の傳來格式と能くも  
畫筆跡の宜うなるものありて是と下と下は  
を秘心者と云ふ也より功者なりは是と云ふ  
功者なりは上と下と下は是と云ふは是と云ふ  
妙品なりは是と云ふは至人なりは是と云ふは  
聖ハ生を以て知るといふも情を以て精くする  
畫聖と云ふは下と下と云て又一品あり何れ  
心は得ず常々怠るは是と云ふは是と云ふは  
終に死す天性ハ畫意と云ふは生を以て何れ  
勤ても上功ハ是と云ふは是と云ふは是と云ふ  
は粉本と云て是と云ふは是と云ふは是と云ふ



いし守義答て曰畫本と用じて毎るは戒めたり  
 俗く描もの下子の不敏者なり粉本と用を欲せし  
 わん描したる畫品ありしといふ常人の難く唯運者  
 たり者といふは茲に固てこり學も異端は落入り強し  
 名とう教とぬし是學者の深く勉じまや他又一種  
 あり功者より上方ハ各別なり論ずり及んす毎るは  
 粉本と用て古人の規能と遠く正るは描しと欲する  
 者ハ己の愚さを知り古人の聖なりと悟るなりと亦て  
 畫のなるは自ら憐れと教し神靈と操ると  
 於し者之を以てあれと功とん描し必も善く  
 之を背されんたり

○ 師守房曰畫のあり輕

乃一字止の故に意以て輕くしと書て之を輕しと  
 難くたり故に初學者の畫品皆此も此を以て輕し畫  
 の性なりと知しとて極彩色の強なりといふは輕墨の  
 こととわきまを置きては傳あり筆法と以て述るは  
 是大秘なりと心得しとを懸て心通するの言妙なり  
 下師曰の二 陰ハ筆外ありしは是を筆外と云ふ也  
 とも強し秘たるは靈か去て活す 墨色 墨色  
 潤るは或人曰潤ハ自然の妙は傳あり描るは  
 しくかき扱て懸てぬし又深墨も淺墨も筆多  
 合て濁ざる極る墨とりて書んぬあれは必也  
 て佳なり予退てぬと家よ令言し

骨法 骨法















源物も三分うてそ一川程おいらひあがりみせ  
ましつゝ物事のさとゆたき出すかすひ入と合ふし  
白紙に模様の内あれもいねさへし若くもは用乃  
枝葉と事へくはるる万物皆あり異國の法は文の如く  
大和の法は物のみしとて法は物のうらたは法のことも  
いつと異國の法は実るてはよく風雅うらたは法は朝の  
ままにまされ工なり大和法は屋上と云て唐中を  
於にもかまの函石今子起し教明なり我探幽流  
又千果外子秀て奇妙と出たり 地挽法は雲の比抄は雲  
と爲して 二篇引しひびされし和子かつとりとし  
てよし永真脚は雲と持して一編川を流し比

引とす、まを厚と出て若くは深々れむのやし一  
それとまをらひん合所あて若くは法のいひく子  
孔のわづら子れきし強くぬ面白し徳細乃心す海  
〔總論〕 法右の能畫の人乃物と描しを法あたりし  
もわづらと若く用く趣あてし改へしとて山水は  
比の強とてしとれと半禽獸も意くは法とわしとれ  
拒也の類し亦志り置供わしとや○本朝古今  
畫士名をたかり者多し法といへたるに能畫の曲  
わらふは志りたを貴敬すし一法畫ハ實し真し經  
之優法はたて若くは權なり○萬張と採しむく  
輕すし一美すれん氣の統てわくとし○凡法は何人



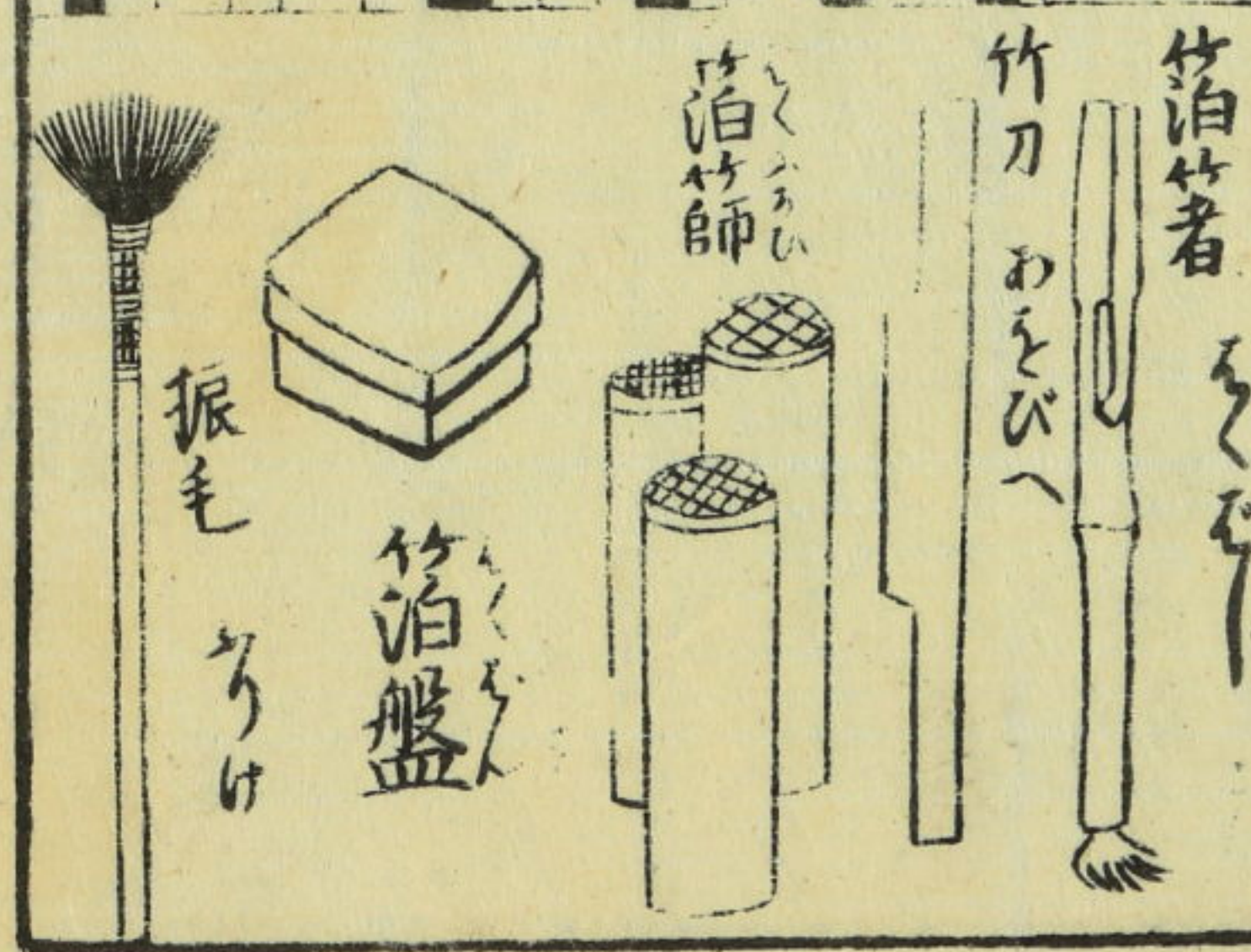
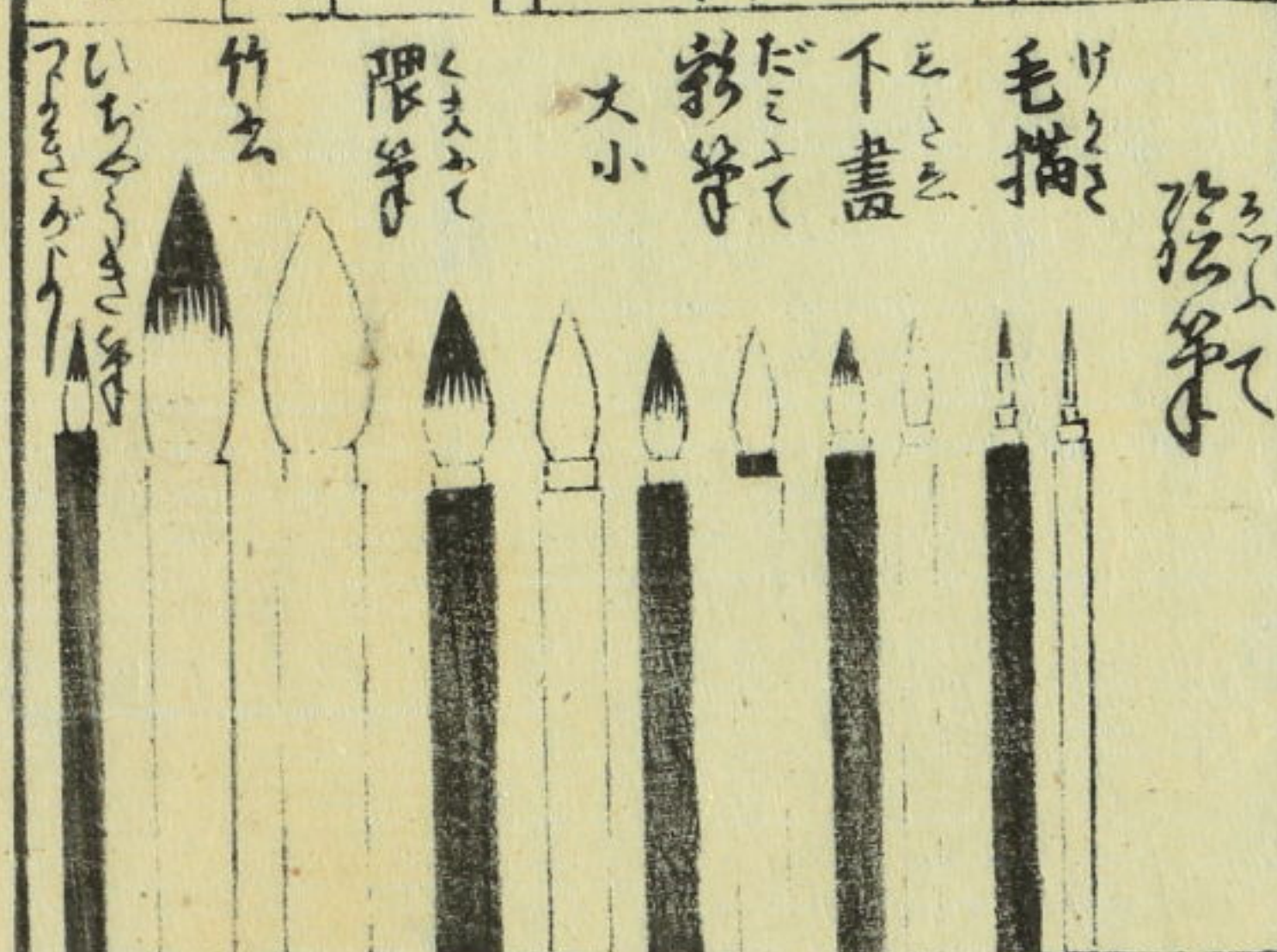
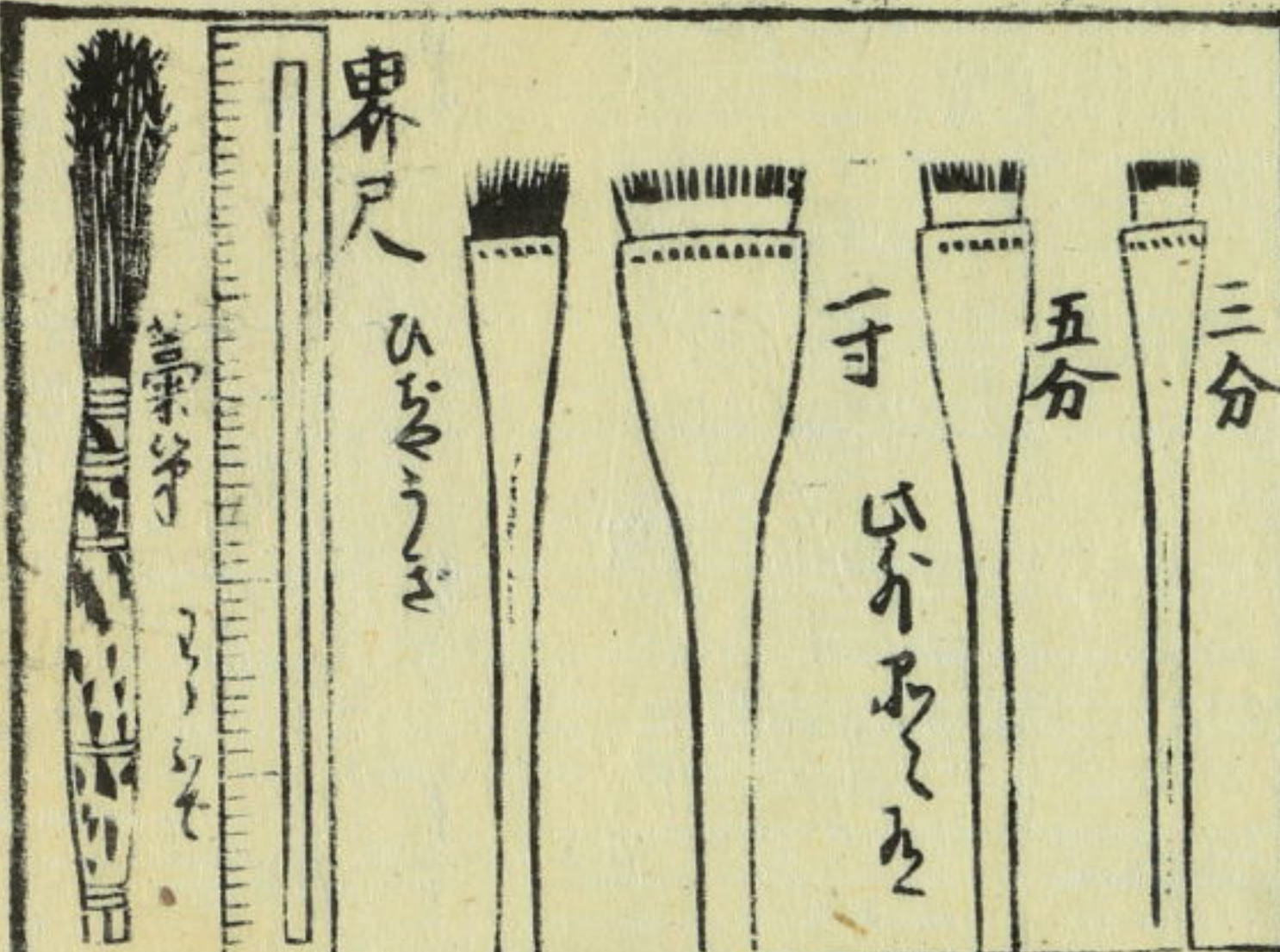




の混合は成てん物の中は線の及押し高く押とされ先  
 紙に水とわけておいて押を中ううり散りも製に他下の紙  
 付さるもいやし製法はくくと月の明りよー

繪研子

二分三分より  
 五六寸より



切流之器

研子	微塵	小山椒	大椒	松葉	大石
揉砂子				又和とも云	一寸五分
					小石とハ五分

畫具之制法極秘傳

緑青 必緑を石に調ひより物畫史曰得るの中より  
 撰いり ○製法ハ先緑青と楮をよ入て膠と加へるの  
 乳本を燈おし研て又との清水とあつぎをへく  
 底に貼て楮と灰を一敷緑青といふ又是をその皿に  
 乾難て納て底に付と二敷緑青と云又ハ清水と云  
 おの碟よ入て晝一晝日を乾くとの法うり時清水と攪  
 下子付たりと云はれ日干乾て楮と白緑と云し又次くと







白緑

草木の根葉とわたり又藍と赤とすし初制する  
時ハ熱湯とて糝とくわく干野玉とす

緋青

この制法ハ蘇子同し糝と濃合し利の  
これと摺り詳書と出ハ蘇子より白緑と出ハ如し

大田氏曰粉中子指と入て了るより糝は其の  
緋青不敗ハ花緋青とす凡緋青とわると初法其の如し

淡緋

畫史子白を俗云詳書とすハ緋青塗の括或  
衣裳なりとすハ或ハ青中子利の

花緋青

硝石と燒てハ粉と云摺り糝と合て利の  
銀朱 本草子石高脂と水粉と合て作ると摺り

赤と入糝を合て利の上子糝の如くと赤とす

和漢朱の色同しかつす和をより

朱黄色

人面の作より利の

朱墨

朱と墨と合て他尚流ハ丹と合と膠とわはせす

黄丹

鉛と硝と合て作ると糝研を甚細末より時  
あか粉入て摺り膠と合て俵小

丹臭

丹子粉と合て利の他肉色の赤も入り

肉色

丹子粉と合て朱とわると肉色とわたり丹  
と塗り此朱と丹と合てわり上子朱とわると名淡紅

生燕脂

一名綿胭脂 之を畫傳子調脂とわり唐より  
朱をこをとり朱の汁とも云燕脂とも云深こも  
古終とつり血子入て着とみし群てることと月



不<sup>レ</sup>用又炭火の上<sup>ニ</sup>墨乾<sup>ス</sup>と<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>膠<sup>ト</sup>の<sup>ミ</sup>加<sup>ハ</sup>

墨<sup>ノ</sup>燃<sup>レ</sup>脂<sup>ノ</sup> 生<sup>ル</sup>ん<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>墨<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>膠<sup>ト</sup>の<sup>ミ</sup>加<sup>ハ</sup>

生<sup>ル</sup>燃<sup>レ</sup>脂<sup>ノ</sup> 蛤<sup>ノ</sup>粉<sup>ヲ</sup>生<sup>ル</sup>ん<sup>ニ</sup>加<sup>ハ</sup>川<sup>ノ</sup>淡<sup>ノ</sup>紫<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>

燃<sup>レ</sup>脂<sup>ノ</sup> 蛤<sup>ノ</sup>粉<sup>ヲ</sup>生<sup>ル</sup>ん<sup>ニ</sup>加<sup>ハ</sup>陽<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>化<sup>シ</sup>細<sup>ク</sup>搗<sup>テ</sup>膠<sup>ト</sup>入<sup>ル</sup>

燃<sup>レ</sup>脂<sup>ノ</sup> 生<sup>ル</sup>ん<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>蛤<sup>ノ</sup>粉<sup>ト</sup>合<sup>シ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

胡<sup>ノ</sup>粉<sup>ヲ</sup> 三<sup>種</sup>あり<sup>ニ</sup>白<sup>ノ</sup>堊<sup>ト</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>去<sup>リ</sup>胡<sup>ノ</sup>粉<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>

畫<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>用<sup>ハ</sup>蛤<sup>ノ</sup>粉<sup>ヲ</sup>ま<sup>カ</sup>り<sup>テ</sup>燒<sup>テ</sup>比<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>

若<sup>ク</sup>搗<sup>テ</sup>ぬ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>夏<sup>ノ</sup>月<sup>ニ</sup>必<sup>ズ</sup>す

く<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>曝<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>用<sup>テ</sup>て<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>

藤<sup>ノ</sup>黃<sup>ノ</sup> 唐<sup>ノ</sup>ノ<sup>リ</sup>牙<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>藤<sup>ノ</sup>樹<sup>ト</sup>切<sup>テ</sup>煎<sup>ク</sup>煉<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>と<sup>レ</sup>也

雌<sup>ノ</sup>黃<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>れ<sup>ニ</sup>わ<sup>ケ</sup>す<sup>ニ</sup>四<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>て<sup>レ</sup>搗<sup>テ</sup>墨<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

藤<sup>ノ</sup>黃<sup>ノ</sup> 志<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>蛤<sup>ノ</sup>粉<sup>ト</sup>合<sup>シ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

藤<sup>ノ</sup>黃<sup>ノ</sup> 志<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>蛤<sup>ノ</sup>粉<sup>ト</sup>合<sup>シ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

靛<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup> 藍<sup>ノ</sup>澱<sup>ト</sup>を<sup>レ</sup>乾<sup>カ</sup>す<sup>ニ</sup>帛<sup>ヲ</sup>包<sup>テ</sup>水<sup>ヲ</sup>投<sup>ジ</sup>て<sup>レ</sup>干<sup>ス</sup>

膠<sup>ノ</sup>汁<sup>ヲ</sup>ぬ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

淺<sup>ノ</sup>葱<sup>ノ</sup> わ<sup>ケ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>ニ</sup>蛤<sup>ノ</sup>粉<sup>ト</sup>合<sup>シ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

草<sup>ノ</sup>綠<sup>ノ</sup> 苦<sup>ノ</sup>綠<sup>ノ</sup> 膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

ら<sup>ウ</sup>多<sup>ク</sup>と<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

黃<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup> 志<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

黃<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup> 志<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

黃<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup> 志<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>

黃<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup> 志<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>膠<sup>ト</sup>加<sup>ハ</sup>



しよ云より搦てあつと終を加ふ

紫去具 志より路粉を合膠を加ふ

紫去褐 紫去のたつとわり夜黄とくつる或ハ志黄わのらう

と合ハ或ハ少人志と黄志と合と

雲具 蛤粉よ雲と合せ膠を加ふ角色云乾澱と加ふ

藍去赤と云

墨具褐 墨をわりて夜黄とくつるうつと又わりと

褐 丹と夜黄と雲と合と膠を入と又朱墨蛤粉と合

しよ云よりとく

合去土 志朱標と云より夜黄と丹を合膠を加と

青鶴色 白細と夜黄と加へ終を入るも褐も胡粉も云

金翅鳥色 白細と苦源と加ふ或ハ白六と合去と加ふ

肉色褐 赤標と合と云肉色の上よりとわり終生去云

紅色 先あつと雲と生去と加ふ

紫藤色 肉紅と云淡黄と胆脂と加ふ

濁色 赤色 生去と漆と金ととく

金泥 箔と礫と入膠を一滴入て中指と無名指ととく

志より研る滴と入糖の上より温て又搦し加此す

数十分より細末として泥のくくぬ湯を多く入て敷割

形を底に貼て採かしく厚水と乾て泥糟をかりかり

膠を加へ候へば終至時と石入如し炭火を焼

至り泥とわると地よ黄膠をわると泥の周を少塗り



塗へー又茶を塗もよー或は友葵の具或は肉を  
又丁子の葉湯濃して朱少友葵申入てぬるもよし

黄膠

朱と藤黄と合膠を多く加てぬる

銀泥

銀粉とけしつる法金泥と同し蛤粉膠ぬり

して泥と塗る

雲母

搗てふと膠と加へ白根白菊の上より少許て芝とま

銅青

系線まよと云本草漉子硝と銅より緑生してより

晒乾

とより搗て水と膠を合と又水乾して使もよし

銅白線

銅線を粉粉を合と膠を加へ

黄明膠

牛乳皮を煮て作る若くは透通るよし

名不没し煮て痛の陰より加へ晒乾のち冬月よ

膠と墨を納じ上より雪と多く積む数日雪を溶かす

とかり膠をいれて柔子ぬると乾し貯て用ゆ

明礬石

透るよよし尋に生を粉りしてを礬石水に

時よ用ゆ

○守篤曰

凡此のものと研用する餅煉と云ふあり

神に乾研して能く搗て此より微し入て研ぬると

うらめてぬるよよしと添て研り

畫彩補遺

石青

研て名色と分て三種と凡頭青二青

玉青は細く石青堅くして碎へる者あり



少許強入るれは候研細うして泥の如し

朱砂しよさ すからら辰砂しんさよりあつらひの者ものと用もちてし

銀朱ぎんしよ 朱砂しよさよりあつらひと以もちてあつらひ代しろ

珊瑚末さんごのま 唐畫たうがの中なかよりあつらひ種しゆの色いろ久くと磨こてあつらひ世ようあつらひ

鮮あざやかなりあつらひとあつらひ紙し日ひ乃の如ごとくあつらひ宣和せんわ内府ないふ印色いんしきも亦また多おほ此こと用もち

雄黄ゆうわう 多おほ飛との法はふハ朱砂しよさとあつらひ同おなくあつらひ畫かよあつらひ黄葉わうがふと人衣にんえとあつらひ

用もち也もち他た金かねの上のうへに用もちるとあつらひ忌いむあつらひ金かね殿てん雄黄ゆうわうとあつらひつあつらひれあつらひんあつらひ板いた

月の後のち焼やてあつらひ慘色せんしきとあつらひなる

石炭せきたん 此こ程ほど少すく量りやうの中なか用もちるとあつらひ極ごくとあつらひ磨こてあつらひ細研さいけん松皮しょうひ及および

乳金にゅうかね 金かね泥どろよりあつらひ二ふた指さしと用もちてあつらひ磨こくとあつらひ摩ま摺すり

此こ程ほど少すく量りやうの中なか用もちるとあつらひ極ごくとあつらひ磨こてあつらひ細研さいけん松皮しょうひ及および

傳粉でんこな 蛤粉かっこなと角かく猴こう通とし研細けんさいなるあつらひ極ごくとあつらひ用もちのあつらひ今いま聖せい石せき灰はいも可よし

調脂てうし 甚おほくあつらひ指さしよあつらひつあつらひとあつらひ磨こりあつらひのあつらひ砂さをあつらひ此このあつらひ金かね

藤黄とうわう 淨じやう白はく粉こなとあつらひかつあつらひれあつらひものあつらひをあつらひ粉こなとあつらひくあつらひよあつらひ友とも黄わう水すい

をあつらひ雲うんの内うちよあつらひ入いてあつらひ枝幹しえんとあつらひ描えよあつらひ便べん蒼潤そうじゆんとあつらひするあつらひ

赭石せつせき 土つち質しつ堅かたくとあつらひ色いろ麗れいなりあつらひものあつらひをあつらひ粉こなとあつらひ磨こりあつらひ製せい法はふ石せき緑りよく

とあつらひ同おなく

赭黄色せつわうしき 藤黄とうわうとあつらひ赭石せつせきとあつらひ加かへ

老紅色らうしき 銀朱ぎんしよとあつらひ赭石せつせきとあつらひ加かへ

蒼綠色そうりよく 草綿そうめんとあつらひ赭石せつせきとあつらひ加かへあつらひ初はつ末まつのあつらひもあつらひまあつらひすあつらひ用もち也もち



畫學子道統相傳 並 自家傳來

僧如拙 九州人也 住相國寺 僧周文 號春齋 住相國寺 小栗宗丹

狩野正信 同元信 世號嘉眼 祐雪

直信 號松榮 州信 號永德 孝信

法印守信 號宮内卿 探幽齋 法橋守房

小林俊春  
大田守章  
林 守篤



